

橋木俊詔著『女女格差』東洋経済新報社（2008年）

男性の人生においてもさまざまな格差がある。学歴による格差、正規社員か非正規社員かという雇用身分による格差、美男子かそうでないかという見た目の格差など...女性間の格差が“女女格差”であれば、男性間の格差は“男男格差”といえよう。

本書は、女性間のさまざまな格差を論じている。まず、「第1章 男女格差」では、労働や教育面における一般的な男女間の格差について紹介され、女性間の格差は第2章以降に続いている。

どのような両親、家柄のもとに生まれてきたのか(「第2章 女性の階層」)、どのレベルまで教育を受けてきたのか(「第3章 教育格差」)、結婚をするのかしないのか、また結婚をどこまで続けるのか(「第4章 結婚と離婚」)、子どもを産むのか産まないのか(「第5章 子どもをもつか、もたないか」)、専業主婦になるのかそのまま働き続けるのか(「第6章 専業主婦と勤労女性」)、総合職として働くのか一般職として働くのか(「第7章 総合職か一般職か、そして昇進は」)、フルタイムの正規社員として働くのかパートなどの非正規社員として働くのか(「第8章 正規労働か、非正規労働か」)、美人なのかそうでないのか(「第9章 美人と不美人」)...上記のような視点から女性間の格差を検証している。著者は、機会の格差として採用と昇進、結果の格差として賃金をそれぞれ指摘し、女性に対して「少なくとも機会の平等を確保することと、不合理な結果の格差の是正が必要」であることを主張している。

「第10章 おわりに」では、女性の格差問題には「男性がほとんどの場合に関与してくる」と著者は主張する。結婚や出産、その後の働き方などは、確かに夫の影響を受けやすい。夫の地位や身分、収入などによって、女性の意識や働き方も変わるだろう。それに伴い、女性間の格差も生まれてくるかもしれない。ある意味納得できるが、男性次第で女性の生き方、人生が決まってしまうような印象を受け、男性にかかるプレッシャーは否めない。

また、著者は「女性の方が人生のさまざまな段階で選択肢に直面する機会」が多く、「それらの選択肢のどれを選ぶかによって、女性の地位や生活ぶりに大きな影響を与える」という。とはいえ、それは男性にもあてはまる。ただ、男性の場合、その選択肢が社会的に受け入れられるかどうか、人々の意識に受け入れられるかどうか、多数を占めているかどうかである。ニートやフリーター問題などに代表される格差問題でも、男女に対する見方や意識は異なる。多様化した、多層化した社会の中で“合理的な格差”とは何か、“非合理的な格差”とは何かを見極めることは容易ではない。

男女雇用機会均等法が施行され22年...男女間のさまざまな格差は是正されているのだろうか。例えば、採用面ではコース別人事管理が禁止された。また、処遇面でも、厚生労働省の賃金構造基本統計調査によれば、この間男女の賃金格差は徐々にではあるが縮小されつつある。ワーク・ライフ・バランスや子育て支援など、職場における制度的な整備も進み、男性社員の意識も変わりつつある。とはいえ、まだまだ女性が母性を尊重され、持っている能力を十分に発揮し、生き生きと働けるような雇用環境が整備されているとは言い難い。男女間の格差是正は、“女女格差”の是正にどのような影響を与えるのか...興味深いところである。(小倉義和)